

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2017  
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「漫画」 オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

1. 『月に吠えらんねえ』 清家雪子著 講談社 2014-

選者コメント

◆口街には詩人、歌人、俳人が住んでいる。朔くん（朔太郎）、白さん（白秋）、居酒屋 BOXY 大将（牧水）、アッコさん（与謝野晶子）など、詩歌界の著名人がそれぞれデフォルメされて登場。朔くんは腐乱死体が好きだし、白さんは女性にもてるけど危ない人でもあって、犀（犀星）は顔がないし、ぐうるさん（草野心平）はカエルの姿でしょっちゅう殺されてるし。まあ、幻想的で、変なマンガです。

2. 『ピノキオ』 ヴィンシュルス著 原正人訳 小学館集英社プロダクション 2011

◆コッローディの原作『ピノキオ』を思い切り、グロテスクにパロったバンド・デシネ（フランスやベルギーのマンガで、最近は大人向けのユニークなものが多くなってきた）の傑作。ロボット人形ピノキオの大冒険……なんだけど、人死ぬし、血飛び散るし、ピノキオもまわりの人間も攻撃的だし、絵は迫力ありすぎ。子どもは手を出さないように。

3. 『大人のためのコミック版世界文学傑作選 上下』 ラス・キック編 いそっぷ社 2016

◆『ギルガメッシュ』『イリアス』から、ピンチョンの短編まで、古今東西の傑作 47 作品をマンガにしちゃおうというとてもない企画。ポップなイラスト風のものあり、原作が小説だということに文字がまったくないものあり、日本の BL 風の絵柄あり、なんでもありの傑作選マンガ版。カフカの『変身』で虫に変身するのはチャーリー・ブラウン！？

選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

4. 『鏡花夢幻』 波津彬子著 白泉社 2000

◆今年、発表から百周年を迎えた傑作「天守物語」をはじめ「海神別荘」「夜叉ヶ池」という幻想文学の巨匠・泉鏡花の精華たる三大妖怪戯曲を、濃密なくオリティで漫画化した作品集。原典の文章を能うかぎり活かす姿勢も好ましい。刊行以来、多くの若い読者を鏡花文学の世界へと誘ってきた名著だ。

## 5. 『死者の書 上下』 近藤ようこ著 KADOKAWA 2015-2016

◆文学と漫画が理想的に響き交わした好例としては、本書も逸するわけにはいかないだろう。歌人・民俗学者にして稀代の幻視者でもあった折口信夫による原作は、近代日本が生んだ幻想文学の一頂点ともいべき絶品。その幽暗でときに晦渋とも評される言語宇宙が、鮮やかに視覚化された驚きは、幾度読み直しても薄れることがない。

## 6. 「地底の足音」(『水木しげる魍魎貸本・短編名作選』に収録) 水木しげる著 ホーム社 2009

◆欧米怪奇小説の本格的な翻訳紹介は戦後、江戸川乱歩や平井呈一らによって推進されたが、ほぼリアルタイムで、それらを自家薬籠中のものとして描いた天才漫画家があった。御存知、水木しげるである。本篇はその代表作のひとつで、H・P・ラヴクラフトの傑作ホラー『ダンウィッチの怪』を、山陰の僻地を舞台に再話している。少年漫画誌のグラビア画報なども含めて、水木漫画が欧米怪奇小説の普及に貢献大であったことは記憶されてよい。

選者：小泉凡氏（小泉八雲曾孫・民俗学者）

## 7. 『屁のような人生 水木しげる生誕八十八年記念出版』水木しげる著 KADOKAWA 2015

◆米寿の記念出版で、「幽霊一家墓場鬼太郎」「悪魔くん」「河童の三平」など名作の数々を収録。そして「花町ケンカ大将」「落第王」「余生」では「ユカイな」人生を漫画で振り返る。波乱万丈な88年を「屁」になぞらえるのは水木哲学の真骨頂。亡くなられる4か月前にご一緒したテレビ番組の松江ロケで、私に語ってくれたのはやはり少年時代の「屁」の物語だった。

選者：島田尚幸氏（あいち妖怪保存会代表）

## 8. 『地獄先生ぬ〜べ〜』 真倉翔原作 岡野剛作画 集英社 2006-

◆本作の主人公「ぬ〜べ〜」は、決してスーパースターではない。迷うし、肝心なところではいつもやらかす、ただの教員である。でも、彼の判断基準は決してブレない。真ん中は、いつも「子どもたち」なのだ。今教壇に立つ身として改めて本作品を読むと、「何をしに毎日学校に行っているのか」と、センパイ教員からダメ出しを喰う教育実習生のような気持ちになる。自分にとってぬ〜べ〜は、幾つになっても憧れの“先生”だ。



リストの8冊は、田原市図書館で貸出・予約可能な資料です。2017.8 作成